2006 年度

がん患者とその家族への緩和ケアにおける心的援助者の可能性と望まれる姿

立命館大学応用人間科学研究科
臨床心理学領域
山本　美幸

本研究はがん患者とその家族への緩和ケアにおける心的援助の可能性とその望まれる姿を考察したものである。

我が国において、現在も死亡原因の一位は「がん」であるという状況が変わっておらず、患者のみならずその家族も含めると、日本人のほとんどはがんに向かうことになる。厚生労働者によって立ち上げられたがんアクションプラン 2005 の中でもがん対策の向上に関して、心的側面のサポートが含められる緩和ケアについて推奨されるようになった。

国は地域によるケアの格差を是正するために全国に「地域がん診療拠点病院」を指定し、治療の技術の向上のみならず、がん患者や家族への心理的な援助の必要性を認めている。しかし、それら援助者については、決まった要件を定めておらず、「専門的な看護に携わる看護師、精神保健福祉士、臨床心理、臨床診療管理、ソーシャルワーカーに従事する者が配置されていることが望ましい」という努力義務に留まっているのである。

他方、がん患者の多くは一般病院の病床で一人、孤独感や不安感、死の恐怖や様々なやりきれない感情に向き合わなければならない状況王にある。また、家族も死へのカウントダウンという緊張感や大切な人の喪失感に耐えて過ごすことになる。

ここで、見極めようとしたものは、私の家族と私自身の体験から、がんとの直面とその後の心理的プロセス、家族の心理的プロセスを分析し、いかに現場では医療者だけでは真の心的サポートが困難であるか、医療者と患者や家族の間を調整してくれる人の存在が切望されているのか等の心理的支援とその援助に関わる様々な課題について明らかにすることである。

心的援助の原点には当事者の体験があり、個人的な問題・課題から発せられる、援助に関する新たな発見や研究は多くそこから出発している。この研究もまさにその流れに従って行われ、それをはっきりと活かすことを目的にしたものである。

自らの体験を原点にがんに直面するする患者や家族が基本として、望まれることは何なのかについて考察しながら、医療現場において心的援助者として活躍しておられる臨床心理士や医療ソーシャルワーカー、精神保健福祉士を含む 83 の地域がん診療拠点病院にアンケートを行った。

その回答を参考にし、職種に捕らわれない存在として、がん患者や家族と同じ目線で気持ちに寄り添ってくれる援助者に求めるものは何なのかを論じた。特に、これからのがん患者やその家族のために心的援助者に望まれる課題と姿である。